66

東西医学交流史の一側面——脳研究者ハルトヴィヒ・クーレンベック（一八九七—一九八四）の意識論の背景

濱中淑彦

ハルトヴィッヒ・クーレンベック Hartwig Kuhlenbeck（一八九七—一九八四）はヘッケル、ゲーゲンバウル、フュルブリンガーの系譜に立つ「最後の古典的」脳解剖学者として一家をなした人物であり、彼の比較神経解剖学に関する業績、殊に全五巻の名著「脊椎動物の中枢神経系」（一九六七—一九七八）は世界の学界に広く知られ、彼の研究業績の引用（Irsigler et al. 1991, Szekeley et al. 1992, Kirsche et al. 1993）は今日なお跡を断たない。彼が我が国の医学界に与えた影響は改めて述べるまでもないが、殊に一九二五年に西成甫によって弱冠二十八歳から三年間、東京大学客員講師として招かれ、晩年の小金井良精とも知己となって以来、ヒットラーの政権獲得とともにアメリカに亡命——同じ頃に再度来日——して、一九三五年以降フィラデルフィア女子医科大学（後のペンシルヴァニア医科大学）の解剖学主任教授に迎えられた後にも、彼と交友があり、或は彼のもとで学んだ解剖学者（藤田恒太郎、細川　宏、新美嘉兵衛など）の数は少なくなく、一九五四年には日本解剖学会の最初の名誉会員に推され、また第六十六回日本解剖学会総会（一九六一年）で特別講演を行ったこともあって、日本の医学との縁は決して浅くはない。

しかしながら、彼の関心事が単なる神経解剖学の枠内に留まるものでなかったことは、ゲルラッハ（一九八六）、新美嘉兵衛（一九八五）らの追悼文から明らかである。彼の問題意識は、晩年に至って繰り返し論じた「脳と意識」（一九五七、改訂は一九五九）、「精神と物質」（一九六一）、「脳と知能」（一九六五）、「精神物理学」（一九七一）などの著作に余すところなく反映されており、彼の「神経学的認識論」（neurological epistemology、一九六五）は、最後の大著「人間の脳とその宇宙」（一九八二、独訳一九八六）全三巻において頂点に達したのであったが、別稿（濱中一九八五—一九九五）で論じた通り、その時は既に認知心

理学 cognitive psychology と神経科学 neurosciences の接点において、僅か十五年の間に「意識」を表題として心身問題を論じた単行本の刊行が――英語圏だけをとってみても――優に四十を越える時代となっており、「脳の世紀」にとどまらず、いわば「意識の世紀」の到来を告知するかの如き観をも呈しつつあった。彼の意識論においては、医学と並行してイェーナ大学の新理想主義者ルドルフ・オイケン（ノーベル賞受賞）のもとで学んだ西洋哲学の伝統、殊に「神経学へのショーペンハウアーの寄与」（一九六一）やショーペンハウアー年報のA・ヒュブシャー教授記念誌（一九七二）への寄稿に見られるように、「意志と表象としての世界」の哲学から得たものが医学との関連で再三論じられる一方で、若くして来日した大正時代に、日本語、中国語、サンスクリット語の学習を通じて、更には敬愛する西に同伴して中国、朝鮮などを旅行して東洋文化を直に見聞し感得した「東洋の智恵」もまた見紛うべくもない跡をとどめている――没後には生前からの彼自身の希望により、仏教式の回向が新美によってとり行われたという。本論稿では、彼の意識論の基盤と背景を探りつつ、東西文化の交流史と心身論の歴史が交錯する所に若干の光を投じつつ医史学的考察を試みたい。

（名古屋市立大学精神医学教室）